

先秦思想史上の墨家（概要）

岡本光生

先秦思想史上の墨家

目次

第一章 墨子——人と書物

第一節 墨子——人と書物——

第二節 墨子という個人について

第三節 「墨子」書について

第一節 「自愛」する個人の発見——兼愛と尚賢——

第二節 兼愛上篇研究小史

第三節 兼愛上篇における「自愛する」個人の発見

第四節 尚賢上篇の成立期について

第五節 尚賢上篇における「個人」

第六節 兼愛上篇における対等な「他者」

第七節 兼愛論の展開

第八節 尚賢論の展開

第三章 墨家の互酬と分配の経済思想

——孟子、荀子との対比において——

第一節 荀子の墨家批判

第二節 荀子における欲求と「物」

第三節 孟子と荀子の分業論墨家の分業論

第四節 墨家の分業論

第五節 墨家における財の交換

第四章 墨家の「天」——なにが問題なのか

第一節 「天志」と「明鬼」という口号について

第二節 「ただ乗り」への懲罰者としての「天」

第五章 「禹水湯旱」について——天の權威の衰退過程——

- 第一節 「ただ乗り」する天
- 第二節 伝承の論理的不整合への気づき——韓非子の場合——

- 第三節 「禹水湯旱」伝承について——天と君主——
 - 第四節 「禹水湯旱」伝承の展開——天の権威の衰退過程——
 - 第五節 「禹水湯旱」という口への対応
 - 第六節 「禹水湯旱」をめぐる言説のその後
- 第六章 墨家の鬼神論
 - 第一節 明鬼下篇について
 - 第二節 上海楚簡「鬼神之神」について
 - 第三節 「墨子」公孟篇の二つの対話
- 第七章 規矩考——墨家の幾何学——
 - 第一節 墨家は直角をつくれたか
 - 第二節 規と円形
 - 第四節 矩と方形
- 第八章 「墨子」号令篇の文書主義について
 - 第一節 「兵技巧書」漢代偽作説について
 - 第二節 号令篇の「文書主義」について
 - 第三節 守城の際の情報伝達
 - 第四節 民の納粟にかかわる情報の文書化
 - 第五節 「交換」をめぐる号令篇と孟子
 - 第六節 里長から里民への情報伝達
 - 第七節 号令篇の発想のその後の展開
 - 第八節 補論 「墨経」の価格論
- 第九章 墨家の人口論——数量化する思考——

第十章 墨家の反戦戦略——相互応酬の戦略——

第一節 戦争を防ぐ

第二節 公輸篇における墨子の守り

第十一章 墨家思想——分立、分裂、消滅へ——

第一節 墨家集団の分立から分裂へ

第二節 学派としての終焉——墨家になかったもの——

第三節 天人相関説の危

険・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

第十二章 儒墨比較論

第一節 他者の発

見・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

第二節 荀子との対

比・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

第三節 触れなかった諸篇——天志、非命等の諸篇——

第十三章 近代中国と「墨子」

第一節 アヘン戦争以前

第二節 アヘン戦争以後——他者の出現以降の墨家研究——

第十四章 墨家思想の現代的意義——他者と向き合う世界の中で——

第一章 墨子——人と書物

第一節 墨子という個人について

姓名は墨翟、生地は楚の魯陽、または宋、斉、山東の魯のいずれか。孔子より後に生まれたことは確かであろう。

第二節 「墨子」書について

この節では「墨子」書の組成を紹介し、文献批判についての、思想把握と強く関連させた渡辺卓のそれ、及び文献「墨子」の内に墨翟の思想の典型を求め板野長八のそれを紹介した。

第二章 「自愛する」個人の発見——兼愛と尚賢——

第一節 兼愛上篇研究小史

「墨子」兼愛上篇の内容については渡辺卓の「片務的な要請を捨てて双務の強調に進もうとする意図を示している。」という説が定説化している。

尚同上篇の思想内容についても、渡辺は「人倫の双務性を根本から否定し、『壹同天下之義』という目的をめざしていた。」、そしてこの篇の言説は「墨家在来の口号とはほとんど無関係に提出されている。それは双務・解放の主張とはむしろ反対の志向である。」としている。

第二節 兼愛上篇における「自愛する」個人の発見

父に対する子、兄に対する弟、君に対する臣は「自愛する」存在であり、「自愛する」過程において「自利し」、「君、父、兄」を「虧」く。父子・兄弟・君臣関係に「乱」をもたらす。

秩序を壊乱するという点において、父、兄、君は子、弟、臣と行動原理を同じくする、同等の秩序壊乱者であり、まさにこの点においては両者は対等な存在なのである。

第三節 尚賢上篇の成立期について

墨家の尚賢論は初期の成立と考えてよい。

第四節 尚賢上篇における「個人」

尚賢上篇において「賢」なる概念は「射御」と同次元の、技術に関わる概念である。

「賢者」は君主の政策によって作られるのであり、墨家の尚賢論が、一国の国内において「賢」ならざる存在を「賢者」へと変容せしめる尚賢論であることに注意しなければならない。

この主体は君主であるが、「賢」ならざる存在が「賢者」へと変容する可能性、可変性が前提とされていなければならない。

かくて「自愛する」君主は、自己の欲望を否定せず、すべての民の富貴たろうとする欲望を否定せずして秩序を形成するのである。

第五節 兼愛上篇における対等な「他者」

兼愛上篇は個人を「自愛する過程において自利し他者を虧く」存在として把握する。ある個人は、自己と行動原理を同じくする他者たる個人と対峙する。「自愛」を行動原理とする自己は、「自愛」のために他者からの危害を軽減し、避ける方策を講じなければならない。

尚賢上篇は、すべての人間が富貴と権力を欲求し、君主が「その事の成就」を期待するとき、はじめて尚賢が実現する。

兼愛上篇において、「兼相愛」の実行が個人相互の「善意」に依存している以上、「ただ乗り」の出現する可能性について考慮していない。非攻上篇では自利し他者に損害を与えれば、人々はこれを非とし、上、政をなすものがこれを罰する、として「ただ乗り」の出現の現実と「上、政をなすもの」の罰則の行使によるその防止が、すでに発想されているのである。

第六節 兼愛論の展開

兼愛上篇から中篇への展開が思想上の転換を意味するものではない、当然の展開であることを論じた。

第七節 尚賢論の展開

上篇に比べて、中、下篇、とくに中篇は字数が増えている。しかし、思想内容に新たな展開があるわけではない。

第三章 墨家の互酬と分配の経済思想

——孟子、荀子との対比において——

第一節 荀子の墨家批判

荀子の墨家批判は富国篇の以下にみえる。

墨子の言説は、こせこせとして天下のために不足を憂っている。しかし、「天下が不足に苦しんでいる」、というのは墨子の思い過ぎしにしか過ぎず、……。いま、土地の五穀を生産する潜在力を考えると、人が適切に管理

すれば、畝ごとに数盆の量が得られ、一年に二度も、収穫できる。……「不足」は墨子の思い過ぎにすぎないのであり、天下の万人の認めることではない。

第二節 荀子における欲求と「物」

「荀子」富国篇は、人は、他者と相互依存しながらその経済活動を営んでいる、と指摘する。他者との関係にあっては、それぞれの人間の欲望は、荣辱篇にあるように同質であり、それぞれの人間が欲望をほしいままにすれば、欲望の対象たる「物」の量が限られている以上、そこに紛争が生ずる。そこに社会を崩壊から防ぐ手段として社会的差等たる「分」の必要性と根拠があるのだが、「分」を実現するのは、「礼義」の「人の情性」を「化」するはたらきが必要となる。

「化」は「原初の性質を失ってしまって、もはやもとに戻らない」状態、またそのようにすることをいうのであるから、それぞれの人間の「礼義」によって「化」されてしまった「欲」はそれぞれの「分」の限度内に縮小されてしまうことになる。かくて欲望の総量が限定され、見かけ上の「物」の総量は増加することになる。

荀子は社会的紛争を「欲」の縮小の方向で解決しようとする。そして、欲が礼によって化された時点で「物」の生産の問題は、楽観的にとらえられるのである。

第三節 孟子と荀子の分業論

経済の側面における荀子の墨家批判のもう一つの観点は分業論の観点からの批判である。

農業から分化し、独立した場に存在する手工業者として、孟子によって、宮中に隷属する独自の技術を持つ工匠、玉人の存在が指摘されている。

農業から分化、独立した存在として孟子がより注目するのは、手工業者であるよりも、むしろ商人である。

第四節 墨家の分業論

「墨子」非樂上篇は

王公大人が朝早く朝廷で・・・政治を処理するのは、その分事である。士君子が・・・倉廩府庫をみたすのは、その分事である。農夫が・・・田畑を耕すその分事である。婦人が・・・紡ぎ布を織るのはその分事である。

としているが、ここでは支配階層と被支配階層との分化が語られ、次に男性は耕し、女性は紡ぐとして、性別による「分業」が語られている。

墨家の「分業論」は性別による「分業」であり、社会的分業を問題にするものではない。性別の「分業」である以上、その結合は自然的であり、即自的である。そこには、両者を媒介する役割は語られない。

第五節 墨家における財の交換

自愛自利する他者の関係は「利」の相互のやりとりにおいて問題となり、尚賢下篇では「有財者、勉以分之。」と財の分配に展開している。

兼愛論における「利」のやりとりは、「他者Aを愛利した他者B」、という特定の関係にあるもの相互に成立する関係である。

第四章 墨家の「天」をめぐって——なにが問題なのか——

第一節 「天志」と「明鬼」という口号について

墨家思想の原点である兼愛上篇において「天」なる概念がまったく語られていないにもかかわらず、墨家が尚同論などにおいて「天」なる権威を提示したのか、その必然性を考察した論稿はないように思われる。

魯問篇に、墨子自身が自己の主張を要約して語った記述があるが、そこには「尊天、事鬼」とはあっても、「天志、明鬼」の口号はみえない。このことから見ても、「天志」および「明鬼」という口号は他の八つの口号とは異質なものだと思われる。したがって「天志」論および「明鬼」論に展開される主張は、墨家思想の基底に存する思想ではないであろう。

第二節 「ただ乗り」への懲罰者としての「天」

他者からの一方的な「愛」を受け入れつつ、互酬の原理によらず、他者を「愛」さない存在が一人でも存在すれば、この兼愛秩序は崩壊する。非攻上篇はそうした存在の出現を認識している。この存在を罰するのは、その人間とは次元を異にする存在でなければならない。

かくて、この世界に秩序をもたらすのは、「人」と次元を異にした存在、天である。

墨家の天は能動性を有し、欲求を有する存在である。ここにおける天は人間の代表である天子と物質的なものを媒介として「取引関係」にある。

第五章 禹水湯旱について——天の權威の衰退過程——

第一節 「ただ乗り」する天

天が湯に「ただ乗り」したのではないかと疑われる古記録が兼愛下篇に引用されている。

湯に天は大旱を降した。湯はひたすらあやまるのであるが天が、湯の「尊天事鬼」という態度に、一方的に「ただ乗り」したのである。

第二節 伝承の論理的不整合への気づき——韓非子の場合——

堯、舜、禹にかかわる古伝承の持つ論理的な不整合について、韓非子が言及している。

第三節 「禹水湯旱」伝承について——天と君主——

禹水湯旱禹という伝承は漢代にも継承され、武帝期には大きな問題となっていた。

武帝がみずからの治世を上古の至治の世に比そうとした、しかし深刻な疑問を含む策問が記載されている。

上は諸儒に策を詔し、制して曰った。（天人相関の発想にもとずいたうえで）禹湯水旱についてその原因はなになのか。

とあるのがそれである。

この策問の基本的発想によりつつ、公孫弘は「湯の治世における大旱」については、「桀之余烈」によって生じた事態だと説明しつつ、湯の責任を否定し、したがって武帝以前の皇帝が暴王でない以上武帝の治世に大旱の生ずる恐れはまたくない、と断言する。

第四節 「禹水湯旱」伝承の展開——天の権威の衰退過程——

前漢前期の実務官僚は自然現象である水旱を粟米の蓄積によって解決しようとする。

第五節 「禹水湯旱」への対応

武帝にとって、皇帝は経済合理性からも自由な存在であるべきであった。こうした君主観からすれば「禹水湯旱」はありえない現象であり、この現象を矛盾なく説明する必要があった。

公孫弘の観点からすれば、湯の大旱は前代皇帝（景帝さらに文帝）が桀のごとき暴君主でない以上、起こるはずはないのである。

この観点を受け入れた武帝はなんのためらいもなく、財のすべてを自由に再生産のための投資と消費に向けることが可能になった。

第六節 禹水湯旱をめぐるその後の展開

後代でも禹水湯旱問題は白虎通、論衡に触れられている。

第六章 墨家の鬼神論

第一節 明鬼下篇について

「鬼は存在しないのか」、あるいは「鬼神は存在し、かつ必ず賢を賞し暴を罰するのか」、あるいは「鬼神は存在し、かつ『必ず賢を賞し暴を罰するという存在ではない』のか」、きわめて混乱の来しやすい問題が、明鬼下篇、公孟篇、「鬼神之明」において議論されている。

明鬼下篇は、無鬼論者にたいし、多くの実例をあげ、鬼神の存在すること、鬼神は善を賞し、悪を罰することを主張する。

公孟篇では、鬼神の存在を前提にしたうえで、それが「明」であるか「不明」であるかを問題にしている。

公孟篇の儒家は、天、鬼の存在を肯定したうえで、その不明、不神を主張し、墨子は天、鬼の存在を肯定し、かつその神明を主張している。ここにおいて、公孟篇の論敵と明鬼下篇の論敵とは明確に主張が異なる。

第二節 上海楚簡「鬼神之明」について

「鬼神之明」と公孟篇の二つの会話がどのような関係にあるのか、また何故墨家がこの一文を「墨子」書に採用しなかったのだろうか。

「鬼神之明」は前半が欠損している。欠損部には、鬼神が存在するか否かの議論があり、そこでは存在すると結論づけられたはずである。

鬼神の存在不存在の議論に決着をつけたうえで、この一文において、まず古の聖王、暴王の例が挙げられ、善人が賞され、暴人が罰せられた事実が述べられる。鬼神が明知であることはここでは何の問題もない。しかし、次に述べられるのは、天下の聖人が殺され、天下の乱人は、長寿を保ったという、善人が福を与えられず、暴人が罰せられない、という事例である。前件が真、後件が偽。この事例は $P \supset Q$ を否定する事例であり、この事例が発見されたことは、「賞善罰暴也」という命題が誤りであることを示し、鬼神の明知を否定することになる。しかし、この文章の作者は、解答を見出す。「それができる力を鬼神が持ちながら、それをしないのか、可能だがやらない」、あるいはまた「それができる力を持っていないからできない。」の二方向への答えである。

いずれの答えにせよ、「賞善罰悪」の命題の普遍性に抵触する。これらの事実は「墨子」書から排除されたのである。

前件が成立していない場合の命題の真偽であるが、この問題は以下にみる公孟篇において解決されている。前件が成立していない場合は、後件の真偽にかかわらず、命題全体は真なのである。このようにみてくると「鬼神之明」と公孟篇の記述は四つ一組になって、同時に発想され、うち三つが「墨子」本文に採用されたとも、論理的にはいいうるであろう。

第三節 「墨子」 公孟篇の二つの対話

条件命題において前件が否定されている場合の条件命題の真偽の問題である。公孟篇はその場合、後件の真偽にかかわらず、条件命題は真であるとする。

第七章 規矩考——墨家の幾何学

第一節 墨家は直角を作れたか

直角は前提から出発して作られる角度である。墨家は水面に重りを付けた糸を垂らして作った。直角は物理的方法によって作成される。

第二節 規と円形

「墨経」の経・説54、58を論じた。

第三節 矩と方形

矩を用いて方形を作図するとき、二つの問題が生ずる。第一の問題は作る方が正方形か長方形かという問題、第二の問題は、第一の問題より根源的であるが、方の四隅の直角の作図の問題、すなわち矩の「直角」が「直角」でありうる根拠の問題である。

第二の問題については、数学的根拠のないことはすでに述べた。

第一の問題については、「荀子」不苟、「呂氏春秋」別類はすべての「方」は相似であるとする。「方」は正方形でなければならない。

第八章 「墨子」号令篇の文書主義について

第一節 「兵技巧書」漢代偽作説について

「兵技巧書」漢代偽作説がかつて有力であった。近年出土した「墨子」城守諸篇と思われる断簡の分析によって、これら諸篇が後期墨家の作であることが明らかになった。

第二節 号令篇の「文書主義」について

「墨子」号令篇は論点は

- 1 城邑のすべての人民、老若男女が守城の戦争に参加すること。
- 2 守城戦争のさいの上位者から下位者への、また下位者から上位者への双方向の情報伝達は文書によること。
- 3 官の民からの食糧、物財の調達と戦後のその返却に際しては、官の発行する「券」を媒介にして行われること。

である。とくに最後の論点は、そこにみられる発想が、前漢前期の実務官僚に継承されている。

第三節 守城の際の情報伝達

成人男女を組織した守城のための軍事組織において、重要な情報は、文書によって構成員に伝達され、明示される。

第四節 民の納粟にかかわる情報の文書化

守備軍の備蓄していた物財が不足するかもしれない。

号令篇はそのような場合に民から食糧を徴発する。この場合、民の申告は一定の形式を備えていなければならず、文書化が徹底していたことがわかる。

第五節 交換をめぐる号令篇と孟子

粟米と「券」とが交換される、戦いが勝利に終わった後、粟米はすでに消費されてしまっているのに、「券」は、「賞」に交換される。交換の問題を論じた孟子の見解と号令篇のそれを対比してみたい。

対比の論点はつぎの五つである。

- 1 交換の行われる時 号令篇は守城戦の直前。孟子は平常時。
- 2 交換の行われる場 号令篇は官の設定した場所。孟子は市場。
- 3 交換への参加者たちの立場 号令篇は官と民、孟子は民相互。
- 4 参加者双方の情報量の格差の問題 号令篇は官が情報を秘密にする。孟子は双方が同量であるべき。
- 5 交換されるものはなにか、の問題 号令篇は米と「券」、孟子はそれぞれが必要とするもの。

第六節 里長から里民への情報伝達と文書主義

「文書主義」は、平常時にも採用されていたと考えられる。

第七節 号令篇の発想とその後の展開

前漢実務官僚の発想のなかに墨家的発想がみられる。

第八節 補論 「墨経」の価格論

米の借入価格、返却価格について参考となる議論が墨経にある。

第九章 墨家の人口論——数量化する思考——

節用上篇には結婚年齢を十年早めれば婚姻持続年数が倍になるのだから、人口を倍にすることができる。すなわち女性の合計特殊出生率に類する発想がみられる。数字をあげて、人間の出産を数量的に取り扱ってモデル化、統計化して議論している。

第十章 墨子の反戦戦略——相互応酬の戦略——

第一節 戦争を防ぐ

魯陽の文君への説得は相手の抵抗を考慮にいれている。

第二節 公輸篇における墨子の守り

反撃の恐れが戦争を抑止する実例を挙げた。

第十一章 墨家思想——分立、分裂、消滅へ——

第一節 墨家集団の分立から分裂へ

陽城防衛戦の故事は墨家集団の成員の忠誠を誓う対象が、「鉅子」という抽象的な地位ではなく、人格的個人であることを示唆する。ここに墨家集団の分裂の萌芽がみえる。

第四節 学派としての終焉——墨家になかったもの——

墨家は開祖を神格化しなかった。そこに墨家学派の終焉の秘密がある。

第四節 天人相関説の危険

墨家の天志論は、天は天子を譴責する、と読み取れるのであり、皇帝の宮廷に天譴説の持ち主がいたらきわめて危険である。

第十二章 儒墨比較論

第一節 他者の発見

自己と同等な他者を発見したことが墨家の先秦思想史上の意義である。

第二節 荀子との対比

荀子もまた、人間を欲望を追求する存在として把握した

第三節 触れなかった諸篇——天志、非命等の各篇——

「墨子」非樂上篇についてほとんど触れなかった。そこには積極的主張がないからである。

天は、「ただ乗り」への懲罰者であって、兼愛上篇には存在しない観念である。「墨子」の天志三篇は重要度の低い篇である。明鬼下篇は鬼の实在を列挙した篇にしかすぎない。非命三篇も同様である。

第十三章 近代中国と「墨子」

第一節 アヘン戦争以前

墨家への関心は中国内部の問題であった。

第二節 アヘン戦争以後——他者の出現以後の墨家研究——

西欧を「他者」として意識しての墨家への関心であり研究であった。

1 第十四章 墨家思想の現代的意義

墨家思想の現代的意義を論じた。